

# 大ヨークシャー種系統豚「タテヤマヨークⅡ」の造成

～繁殖能力と枝肉成績の向上を目標とした種豚の改良～

副主幹研究員 新山 栄一（畜産研究所）

## 1. 背景

畜産研究所では、県内の養豚農家に向けて、肉豚生産のための種豚（主に母豚）として利用される「タテヤマヨーク」の供給を行っています。

しかし、「タテヤマヨーク」は、平成5年度に系統豚の認定を受けてから現在まで、外部からの豚を導入することなく種豚供給及び系統の維持を行ってきたため、近交退化現象<sup>\*1</sup>が懸念されてきました。

そこで、平成18年度から、新たな系統豚の造成に取り組み、「タテヤマヨーク」が持つ高発育能力を引き継ぎ、更に、繁殖能力の向上と背脂肪の厚さの改良を図ることとしました。

## 2. 研究成果の概要

定総合育種価<sup>\*2</sup>の推移は、第6世代の雄では11.95、雌では12.26となり、順調に改良が進みました。

### 1) 各改良形質の推定育種価について

- ①平均総産子数は、第6世代の雄では0.73、雌では0.72となり改良が進みました。
- ②背脂肪の厚さは、第1世代の雄及び雌が各-0.11、-0.36であったのに対し、第6世代では-4.68、-4.82と改良が進みました。

### 2) 各改良形質の表型値<sup>\*3</sup>について

- ①平均総産子数は、基礎世代が8.8頭であったのに対し、第5世代では10.2頭となり、1.4頭増加しました。
- ②背脂肪の厚さは、基礎世代の雄及び雌がそれぞれ20.8mm、25.2mmであったのに対し、第6世代では20.7mm、22.3mmと薄くなりました。

以上の結果から、「タテヤマヨークⅡ」が、(社)日本養豚協会から豚系統として認定を受けました。

## 3. 成果の活用

県内の養豚農家においては、飼養環境や、施設投資などを考慮すると、規模拡大が困難な状況にありますが、今後、本系統豚を県内養豚農家に種豚として供給することにより、

- 1) 総産子数の増加により、既存施設の効率的活用が可能となり生産性が向上します。
- 2) 背脂肪の厚さが薄くなることで、枝肉格付けが向上するため、収益性も向上します。
- 3) 系統豚「タテヤマヨークⅡ」を種豚とした肉豚の生産により、「とやまポーク」ブランドの強化が期待できます。

※1 近縁交配によって起こる、産子数の減少や初期発育の低下などの好ましくない現象のこと。

※2 改良の指標となる遺伝的能力を推定した数値で、本試験では総産子数と背脂肪の厚さの総合的な遺伝的能力の高さを表す。

※3 遺伝的能力と環境効果（世代、誕生月、性別など）で構成される、各形質の測定値のこと。

## 研究成果の概要

肉豚は3つの品種から産まれた交雑種である！

### メス系大型品種の交雑



大ヨークシャー種 (W)



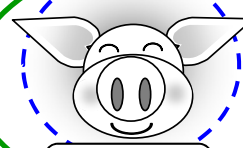
ランドレース種 (L)

系統豚「タテヤマヨーク」  
長期間にわたる系統維持

- 系統豚は
- ① 斉一性が高い
  - ② 能力が明確である
- ×一方、  
近交係数が高くなると、近交退化現象が懸念

雑種強勢効果を利用

### F1とオス系品種との交雑

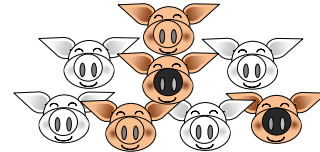


F1母豚  
WL♀



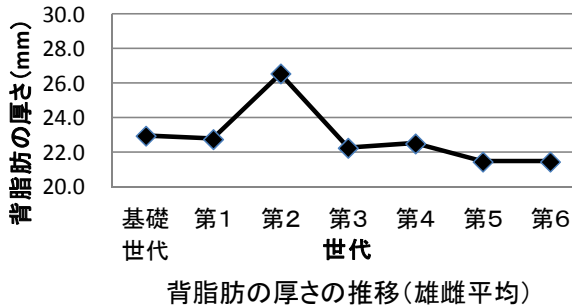
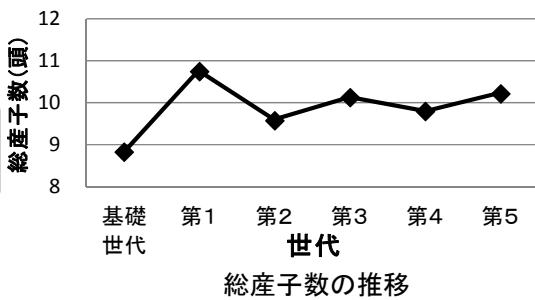
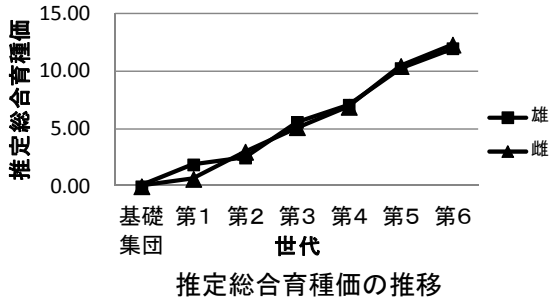
止めオス  
(D)

### 三元交雑による良質肉豚



「タテヤマヨークⅡ」

平成18年度から新たな系統豚の造成を開始



6世代  
を  
経過

## 系統豚「タテヤマヨークⅡ」が完成

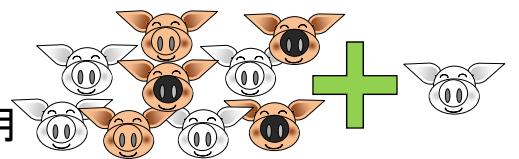
(平成26年3月31日に(社)日本養豚協会から認定)

## 成果の活用

① 総産子数の増加による、既存施設の効率的利用

② 枝肉格付けの向上 ← 枝肉上物率のアップ

③ 「とやまポーク」ブランドの強化



味も鮮度も◎(二重まる)  
「とやまポーク」